

2022年7月10日（日）主日朝礼拝説教

『祈る人の顔』 井上隆晶牧師
サムエル記上1章12～18節、2章1～2、6～7節

①【神殿で祈った後のハンナの顔】

サムエル記は預言者サムエルとダビデ王の物語が書かれています。今日読んだ所は、サムエルが産まれる経緯^{いきさつ}について書かれており、母親のハンナが出てきます。ハンナの夫はエルカナと言って、ハンナの他にもう一人ペニナという妻がいました。ペニナには多くの子供がいましたが、ハンナには子供がいませんでした。ユダヤでは子供が生めない女性は、神に呪われていると思われており、ペニナはいつもそのことで彼女を苦しめました。祭りで一緒に集まって食事をする時も、向こうは大家族ですから沢山の物が与えられますが、ハンナには一人分だけです。よけいに自分が小さく、みじめに思えたことなのでしょう。自分はこの家の厄介者、何の役にも立てない者、神の祝福を失った者と自分を責めていたことなのでしょう。

ある年、いつものように神殿に上り皆で食事をしたのですが、ハンナは泣いて何も食べようとせず、立ち上がって神殿の柱の側に行き、そこで祈りました。「ハンナは悩み嘆いて主に祈り、激しく泣いた。」(1:10)と書いてあります。そしてもし子供を与えてくれるなら、その子を神様に献げると誓います。ハンナは長い時間祈りました。ただ心の中で祈っており、唇は動いていましたが声は出しませんでした。祭司エリは彼女が酒に酔っているのかと思い注意をしますが、ハンナは言います。「いいえ、祭司様、違います。…主の御前に心からの願いを注ぎ出していました。…今まで祈っていたのは、訴えたいこと、苦しいことが多くあるからです。」(15～16)祭司エリは「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるよう」と祝福すると、ハンナはそこを離れました。そのあとに「それから食事をしたが、彼女の表情はもはや前のようではなかった」(18)と書かれています。なぜ彼女の表情は変わったのでしょうか。人は心の中にあるものが顔の表情となって現れ、言葉となって外に出てきます。祈りを聞くと、その人の信仰が分かります。頭が混乱している人は、あちこちに飛ぶような祈りをします。不安な人は、何度も同じ事をくり返し祈ります。神を信頼できない人は、神を説得するような祈りをします。彼女の顔が変わったのは、彼女の心が変わったからです。ハンナの心の中にどんな変化が起こったのでしょうか。この「彼女の表情はもはや前のようではなかった」という言葉はとても大切だと思うのです。顔の表情が変わる、これがキリスト教徒の最大の証しだと思います。教会に行く前は暗い顔なのに、帰りには明るく輝く顔になれば、周りの人は教会には一体何があるのだろう、私も行ってみたいな、と思います。「主を仰ぎ見る人は光と輝き、辱めに顔を伏せることはない」(詩編34:6)のです。

②【ハンナの賛歌から見えてくる彼女の信仰】

この後、神様は彼女を御心に留め、彼女は身ごもり、サムエルを産みます。神はハンナの祈りを聞いて下さいました。2章にハンナの祈りが出てきますが、それを読むと、彼女の心の中を知ることが出来ます。1節に「主にあってわたしの心は喜び、主にあってわたしは角を高く上げる。」とあります。子供ができるということは、神以外にはなしえないことです。サムエルの誕生は、神がハンナと共におられるしるしでした。このハンナの祈りはイエス様の母マリアの賛歌に似ています。マリアがこのハンナの祈りを知っていたからだと言う人もいますが、むしろ、神と出会った人は同じ心境になるのだと思うのです。「勇士の弓は折られるが、よるめく者は力を帯びる。食べ飽きている者はパンのために雇われ、飢えている者は再び飢えることがない。」(4~5節)とは、今まで強く見えていた者が弱くされ、弱く見えていた者が強くされ、豊かだった者が貧しくされ、貧しかった者が豊かにされる可能性があるということを言っています。つまり、人の将来は分からないという事を言っているのです。今、見えていることで判断してはならないし、結論を出してはいけません。神様がある日突然、ある者を高くし、ある者を低くします。「主は命を絶ち、また命を与え、陰府に下し、また引き上げられる。主は貧しくし、また富ませ、低くし、また高めてくださる。…大地のもろもろの柱は主のもの、…人は力によって勝つのではない。」(6~9節)というのは、この世を支配しているのは人間ではなく、神だということです。この祈りをしたハンナはまるで別人のように思えます。神はこのようなお方だとはっきりと語っています。ここには神を知ったハンナがあります。

③【祈りの目的はどこにある】

ハンナは最初、自分の不幸の原因はペニナにあると思っていました。また子どもさえ与えられたら自分は幸せになれる、みじめな思いをせず自信をもって生きていけると思っていました。でも祈っているうちに気がついたのです。神が自分の横にペニナを置き、神が自分の胎を閉じておられるのだということを(1:5)。子どもを与えるのも、与えないのも神であり、人を豊かにするのも、貧しくするのも神であり、命を与えるのも、命を取られるのも神なのです。神がすべてを支配しているのです。ということは、問題はペニナではなく、自分にでもなく、神にあるということが分かったのです。本当に祈っている人は、最終的には「神の問題」になってくるのです。ツイッターやフェイスブックなどに「あの人が悪い、この人が悪い」と書いて、いつも人を批判し、攻撃する人がいます。その人にとって不幸の原因はいつも人なのです。でもその人をそこに置かれたのが神ならば、神に問わなければなりません。人が神に向き、神に心を注ぎ出し、神に「なぜですか？」と訴えること、これが祈りです。ほとんどは答えはありません。答えはないけれども顔が変わることは出来るのです。

●ヘンリ・ナウエンは『静まりから生まれるもの』という本の中でこんなことを書いています。「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。…動きがいつばいに詰まった文節に挟まれて、この静かな言葉があります。…多くの人々の問題に深くかかわっている中心に、独り退く時のことが書かれています。行動のただ中に、沈黙の祈りがあります。人々と心おきなく過ごした後に、独りきりになる時間があります。…その独りになれる所で、イエスは、自分の思いではなく、神の御心に従う決断をする力を得ました。自分の言葉ではなく、神の言葉を語る勇気を、自分の業ではなく、神の業をする力を見出したのです。」

ハンナはどうしても子供が欲しい、そして人に認められたいという《自分の思い》ではなく、《神の御心》にすべてを委ねて従う決断をしたのだと思います。

●島しず子さんという牧師がおられます。彼女には百日咳に罹って重度の障害が残った陽子ちゃんという娘さんがいました。陽子ちゃんは16歳9ヵ月で神様の元に召されますが、彼女がこんなことを書いています。

「私たちがどんなに罪深い存在であろうとも、間違ったことをしでかそうとも、私たちに対する神の愛は変わらない。その上で私たちが死をどのように考えてゆくか、それは生きていた時も、神様の祝福の下にあるように、死もまた神様の祝福の下にあります。そして私たちが生きていた時に、神様のみ手の中にあつたように、死後も神様のみ手の中にあるのです。…いつその終わりがくるか分からないということでおびえているんですね。私もそうでした。…多くの障害者の親子がその恐怖にさらされているので、言いたかったことは、私たちの失敗や私たちのミス、お医者さん、看護婦さんのミスによって、子供たちが死ぬのではなくて、神様が命を支配していて、神様が連れて行くのだから、私たちが失敗するのではないか、お医者さんが失敗するのではないか、そんなことは心配しなくてもいいんだ、ということ。」

島しず子牧師が、ここで言っているのは自分に対する「神の愛」を信じなさいということです。何が起こっても、神はあなたを愛していることを信じ、恐れてはいけないということです。彼女の焦点は人にではなく神に向いています。

祈りの目的はどこにあるのでしょうか。自分の願望を神に聞いてもらうことではありません。神は私たちが祈る前から、私たちの必要をすべて御存じだからです。だからくどくどと祈るなと言われます。それは長い時間祈ってはいけないという意味ではなく、自分の願いを聞いてもらうことだけを考えて祈るなということです。祈りの目的は神を知ることにあります。神の愛を知ることにあります。ここがこの世の宗教と、キリスト教の違う所です。この世の宗教は、相手の神は誰でもいいのです。神が自分にくれる物（ご利益）だけに興味があります。だから与えてくれなければ、他の神々に乗り換えます。しかしキリスト教は違います。神を知ることに最大の目的があります。皆さんはパートナーや出会う周りの人に何を求めていますか？愛でしょう。相手が自分の事を愛してくれていることを知った時、大きな喜びがあります。物ではありません。愛です。愛がなく物だけ貰っ

ても嬉しくありません。信仰も同じなのです。神の愛が分かる、神に愛されていることが分かる、これほど嬉しいことがあるでしょうか。神の自分に対する愛を知った時、人は平安が訪れるのです。これこそ祈りの目的であり、信仰の目的であり、人生の目的なのです。神の愛を知り、豊かな人生を生きたいと思います。